INTERVIEW

西浅井地区診療所 管理者
にしあざい診療所 所長
上田祐樹先生

持続可能な地域医療を目指して

聞き手：山田隆司　地域医療研究所長

初めて赴任した一人診療所に，再び戻って

山田隆司（聞き手）　今日は滋賀県のにしあざい診療所に上田祐樹先生をお訪ねしました．ここはこの春に移転オープンしたばかりで，開所式には私も参加させていただきました．

まず，大学を卒業してからの先生の経歴を簡単にお話しいただけますか．

上田祐樹　私は滋賀県の大津市出身で，平成14年に自治医科大学を卒業しました．卒業後２年間，大津赤十字病院で内科系の初期研修をして，卒後３年目から４年間，甲賀市の信楽中央病院へ赴任しました．信楽中央病院は当時50床のいわゆる総合診療の病院で，外来や入院，さらに在宅も経験しました．

その４年間が終わったあとに長浜市西浅井町の永原診療所という一人診療所に赴任しました．卒後７年目でした．滋賀県の一番南から一番北に来たという感じですね．そこで義務年限が３年残っていたので３年の予定でしたが，後任がいなかったということもあってもう１年いることになり，合計４年，永原診療所にいました．

山田　そこで義務が終了してその後はどうしたのですか．

上田　以前は消化器の内視鏡に興味があって，それで頑張っていればいいという気持ちがあったのですが，永原診療所で地域医療に従事して，外来や存宅，看取りを通して地域をみるということに魅力を感じました．しかし，自分がこのままここにいることが本当に地域にとっていいの

かというのを考えたときに，もう少し自分のレベルが上がったほうが地域に貢献できるのではないかと思いました．最後の年にはある程度慣れてきたので，確かにやりやすくはなりましたが，自分のレベルがこの地域の医療レベルになるという危機感があり，もう一度学び直したほうがいいと思いました．そこで自治医大総合診療部に帰ることにしました．そこでは地域医療とは全く別世界で，いわゆる病院総合診療に携わることになりました．

山田　そうでしたね．そのころ，附属病院の中に総合診療部を作ったのでしたね．

上田　はい．本当に重症で他院では対応できないような患者さんの診療にあたりしました．

山田　他の診療科では受け取ってくれないような症例とか…….

上田　そういう患者さんもおられました．地域で診ていて，重症化した患者さんを病院へ送った後の診療を理解することができたので，非常に勉強になりました．その総合診療部門に３年間いました．

山田　最初から３年間と決めていたのですか．

上田　決めていたわけではないのですが，自分はやはり地域医療がしたかったということがあって，ちょうど３年経ったときに以前にいた西浅井町の診療所が，今後の医療体制を見直すという前提で地域医療振興協会の指定管理になるという話を聞いて，自分にとって地域に戻るタイミングかなと．この地域で地域医療を経験して魅力を感じるようになったという思いもあり，ここで力を出していけたらと思いました．

山田　医師不足の滋賀県にとってもウェルカムだったわけですね．

上田　滋賀県の方にも喜んでいただいて「よく帰ってきた」と言っていただきました．

山田　当時滋賀県は医師不足が深刻で，協会のふくしあの中村泰之先生が乾いた雑巾を絞るようにして時間を作って診療支援をしていましたね．その中村先生から話を聞いて先生にお会いすることになり，協会がここの指定管理をする際に先生に初代所長をお願いしたのですね．

　塩津診療所も一緒に指定管理になったのでしたね．

上田　はい．そうです．この西浅井の永原診療所と塩津診療所，それから菅浦出張診療所の３つセットで指定管理での運営を始めました．

管理者の立場になって

山田　以前にここにいたときと，管理者として赴任されている今では，違ったことはありますか．

上田　違いはかなり大きいと思います．診療自体は別段変わっていませんが，環境だけでなく，いろいろ考えることが変わりきました．義務年限内の決まった期間，または県からの派遣で赴任しているときは，この何年かを頑張ればいいかなというのが少しあって，診療所の運営についても10年先，20年先を見ることはなかったように思います．でも指定管理での運営後は，この地域の医療をどうするか考えるということも一つの任務となりました．

山田　なるほど．地域医療のあり方を提案していくという，腰の据わった取り組みができるようになった訳ですね．かつては公務員であり何事も役所にお伺いをたてる必要があったわけですが，指定管理になったことで，先生は診療所長であると同時に事業管理者であり，経営に対しても